

中国語学習目的の変化に関する調査研究（続報）

保坂律子*、盧尤**

Study on the changing of purposes for learning Chinese language, Second Report

Ritsuko HOSAKA and You LU

1. はじめに

本稿の執筆者である保坂は平成12年度に本学着任、本学での教育歴は20数年になる。また共著者である盧も日本の大学等教育機関で20数年の講師歴を持ち、2022年度より本学非常勤講師として中国語を担当している。

保坂着任当時から本学では第2外国語科目4言語⁽¹⁾中、中国語選択者が最も多い状態が続いている。振り返って平成に入ってから中国語学習者の増加は、中国の改革開放政策による市場開放や、アジア諸国の経済的躍進により人々の関心がアジアに向かい始めたことに端を発している。その結果本学のみならず、多くの大学でも中国語は第2外国語として一定の地位を得たといえる。

その後も中国の経済的発展は目覚ましいものがあり、2010年には中国のGDPは日本を抜き、アメリカに次ぐ世界第2位となった。日中を取り巻く社会環境は平成から令和へと大きく変わり、来日中国人留学生数はコロナ禍で一時減少したものの1999年から2022年の23年間で約4倍⁽²⁾に増えている。さらにコロナ禍収束後の来日中国人観光客、訪日中国人も増加の一途をたどり、私たちの身近に中国人がいる環境がもはや当たり前であることを誰もが感じているだろう。教学の場においては日中を取り巻く社会

環境の変化や中国人と接する機会の増加に加え、急速なインターネット環境の充実が学生の中国語学習目的や意欲にも様々な変化をもたらしていると筆者らは感じている。

本稿は、筆者らが本学の中国語履修学生を対象に令和6年7月に実施したアンケート調査結果と保坂が平成15年（以下H15年と記す）、令和3年（以下R3年と記す）に実施したアンケート調査結果を比較考察し、本学学生の履修目的や意欲、取り組み姿勢等の経年変化を分析し、環境や社会の変化に合った教育方法を考える資とするものである。

2. 令和6年度アンケート調査概要

今回実施した「中国語学習に関するアンケート」はGoogle formsで作成後QRコードを作成して印刷し最終授業内で学生に配布、任意で回答してもらった。Classroomへの掲出を避けたのはメールアドレス等の個人情報を収集しないように配慮したからである。なおR3年度「中国語学習に関するアンケート」はGoogle formsで作成、URLを授業内でClassroomに掲示し任意に回答してもらう形式で実施、H15年はアンケート用紙を作成し印刷、直接回答してもらう形式で実施した。

*人間総合学群 心理学類

**駒沢女子大学 非常勤講師

2.1 調査時期および調査対象

時期：令和6年7月

調査対象：駒沢女子大学 第2外国語中国語
履修学生

有効回答数：38名

2.2 調査項目と調査意図

調査項目は以下に述べる観点から下記項目を設定した。各項目の回答選択肢はH15年度、R3年度は同一であったが、今回は前回までの調査結果に基づき保坂・盧で検討していくつか変更を加えている。この点については3. R6年調査結果の分析と考察で触れる。

Q1中国語選択理由（一番近いもの1つ）

アンケート調査の主たる目的である。選択理由から中国語の学習目的、学習動機の所在を把握し、同時に学習意欲も探れるであろうことも期待する。

Q2単位が取得しやすいか考慮したか

Q1の関連項目である。第2外国語が必修科目である場合には、単位の取得しやすい語学を選択する学生が一定数いることは否めない。H15年の調査対象学生は第2外国語4か国語から1外国語を必修科目として履修していたが、R3年、R6年は全学生が選択科目としての履修である。目的と意欲のより正確な把握のため、また単位を離れた学習意欲の有無の分析のため継続してこれまでと同様に調査項目とした。

Q3中国語の目標レベル

目標とする外国語のレベルは、学習目的、意欲と相関が高いと判断してよい。一般に高いレベルを目標とするにはそれなりの意欲を必要とするからである。本項目は学習目的と意欲を探るものである。

Q4教科書以外の教材利用（複数回答可）

学習に際し教科書以外に辞書や参考書などを使用することは、金銭的にも時間的にも中国語学習に投資することにほかならない。これは学

習意欲と学習目的と相関がある。ここでは利用の実態を把握し、同時に教育効果を高める使用、利用方法を検討する際の参考とする。H15年とR3年の調査では基本的に選択肢は同じとし、「その他」は具体的に挙げてもらった。R3年度の調査では「その他」の選択が増加し、回答からはインターネット環境の充実によって利用する教材等が増えていることが見てとれたため、R6年の調査では選択肢に変更を加えている。

Q5英語との学習比

一般に学習意欲を数値化し客観的に示すことは難しい。仮に学習時間を調査し、1時間が2時間に増えても意欲が2倍になったとは言えないだろう。そこで本稿では学習意欲を相対的に把握するため英語を比較の対象とし、英語との学習比を問うことで意欲を探る尺度とした。

Q6希望する副教材

教科書以外で希望する副教材を調査することは、学生の興味と学習指向の把握に必要である。それらを踏まえ教育方法を考えることは学習意欲の喚起と、教育効果を高めることに有用である。

Q7学習開始後の印象（複数回答可）

学習開始後の中国語の印象を調査することで、学習開始前の中国語に対する学生の期待、予想がどのようなものであるかを知ることにつながる。またその期待と実際の差を把握することは教育効果を高める指導法へと改善につながるが見込まれる。

Q8今後の学習継続予定

今後の学習継続予定を把握することで学習目的や学習意欲、合わせてこれまでの教育効果を知ることができる。

Q9その他（中国語学習の動機や興味、関心など何でも自由に）

個別質問のほかに自由記述欄を設けた。

2. 3 先行調査

過去 R3年、H15年の調査概要は下記のとおり。

1) の実施時である H15年は1、2年生の選択必修科目であったため履修学生が多く回答数も多い。

1) 平成15年 7月

調査対象：駒沢女子大学 第2外国語中国語（選択必修）履修生

有効回答数 計200名（1年126名、2年74名）

調査項目：8項目

2) 令和3年 7月

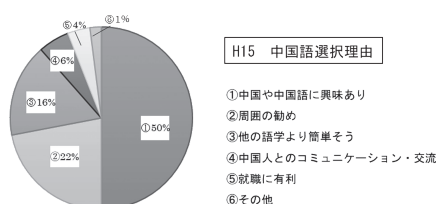
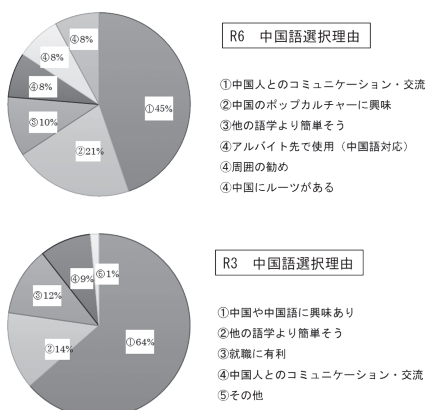
調査対象：駒沢女子大学 第2外国語中国語履修学生

有効回答数：66名（中国語Ⅰ・Ⅲ履修者97名中）

3. 調査結果の分析と考察

本章では令和6年（以下 R6年と表記）の調査結果を令和3年（以下 R3年と表記）、平成15年（以下 H15年と表記）の先行調査結果と比較し分析と考察を行う。R6年度と H15年、R3年の調査では有効回答数が異なるため、調査項目の形式が選択肢中から回答を1つ選ぶものは、比較対照のため回答者数ではなくパーセンテージを用いた円グラフで示す。

Q1中国語選択理由



まず Q1中国語選択理由について取り上げる。R6年の回答第1位は「中国人とのコミュニケーション・交流」で45%を占めている。R3年、H15年ではいずれの年も「中国人とのコミュニケーション・交流」は第4位でそれぞれ4%、6%であったから目覚ましい伸びである。一方 R3年、H15年の Q1中国語選択理由の回答第1位は両年ともに「中国や中国語に興味あり」で、R3年では64%、H15年では50%を占めている。しかしこの数字から R6年度の履修生が「中国や中国語に興味」がなくなったと理解してはいけない。実は R3年の自由記述欄から「中国や中国語に興味あり」の具体的な興味は「中国ドラマや映画、C-pop、ゲーム等に興味、またそれらに見られる中国語」にあることが見て取れたため、それを踏まえ R3年までの選択肢「中国や中国語に興味あり」を R6年は「中国のポップカルチャーに興味がある」に変更した。すなわち「中国や中国語に興味あり」は「中国のポップカルチャーに興味がある」に移行、読み替え可能と理解してよい。その結果 R6年の Q1中国語選択理由第2位は「中国のポップカルチャーに興味がある」で21%となった。

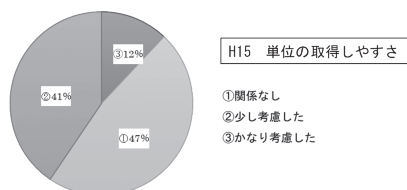
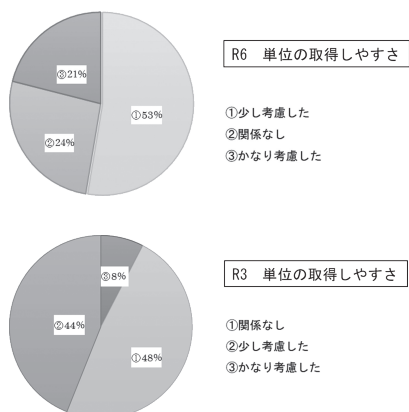
以上のデータから、R6年中国語選択理由は「中国人とのコミュニケーションや交流」(45%)に「中国のポップカルチャーに興味あり」(21%)を加えると回答者の3分の2が、中国人とのコミュニケーションのため、そして中国のポップカルチャーに興味があるからだとわかる。同様に R3年、H15年も「中国や中国語に興味あり」を「中国のポップカルチャーに興味あり」と読み替えれば、それぞれ回答者の73%、56%が

中国人とのコミュニケーションのため、あるいは中国や中国語、または中国のポップカルチャーに興味があるからだと言える。なおR6年に「中国人とのコミュニケーションや交流」が激増した理由については後で考察する。

ところで「他の語学より簡単そう」はH15年には16%で第3位、R3年には14%で第2位R6年では11%で第3位と微減している。これはH15年では選択必修であったことが少なからず影響していると思われる。R3年の調査で目を引いたのは、H15年では回答者の22%を占め選択理由の第2位であった「周囲の勧め」が1%に激減したことであった。すなわちR3年の中国語選択は学生自身の意思であることが明確となった。選択科目時のH15年では「これからきっと役にたつ」という「周囲の勧め」が選択理由の第2位であった。

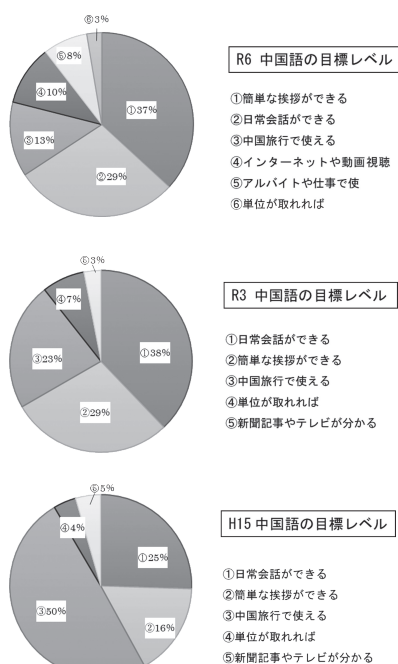
R6年の選択肢には、保坂、盧で検討の上、「アルバイト先で使用」、「中国にルーツがある」を加えた。「アルバイト先で使用」は「就職に有利」ではなく、学生のアルバイト先で中国語対応が必要となることが多々あることや、身内に中国にルーツを持つ学生などが散見されるようになってきたためである。

Q2 単位の取得しやすさ



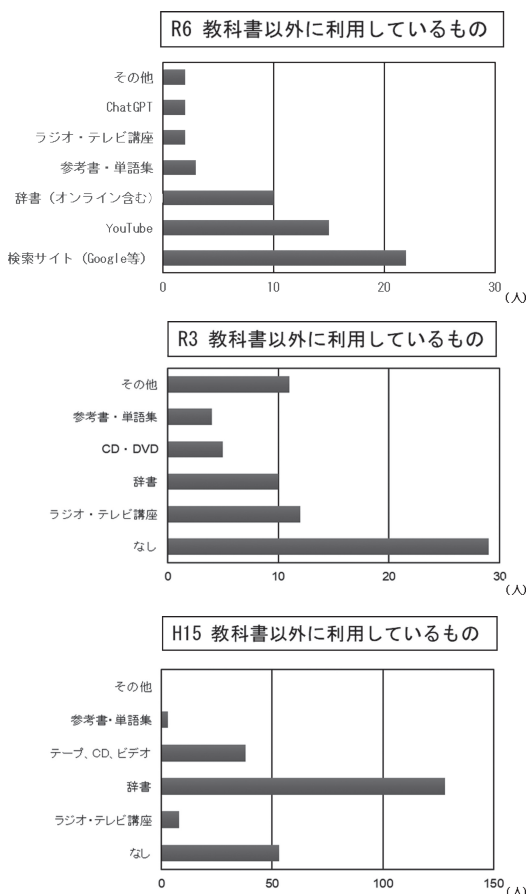
Q2単位の取得しやすさではR6年の調査では約半数が「少し考慮した」と回答している。R3年、H15年の調査では単位の取得しやすさは「関係なし」が約半数を占め、「少し考慮した」の割合は約4割でほぼ同じである。R6年の調査では「かなり考慮した」が26%とR3年、H15年に比べ増えている。R3年の調査では単位の取得しやすさを「かなり考慮した」は8%、H15年の調査では12%であった。中国語選択に前向きな姿勢はQ1の選択理由からうかがえ、また回答者の母数が異なることからR6年に約半数が「少し考慮した」ことがすぐに学習意欲が低いことに結びつくものではないと思われる。

Q3 中国語の目標レベル



Q3中国語の目標レベルの回答で特筆すべきは、H15年の調査第1位で回答者の50%を占めた「中国旅行で使える」がR3年は23%と半減し、R6年ではさらに13%に半減していることである。すなわち H15年では履修者の多くは中国語の使用場面を中国国内と想定していたが、R3年、R6年には履修者が想定する中国語使用場面は日本国内へと変化していることがわかる。また R3年では目標レベル第1位の「日常会話ができる」38%、第2位の「簡単な挨拶ができる」29%を合わせると回答者の約3分の2になる。順位こそ1位と2位が変わるがR6年では目標レベル第1位の「簡単な挨拶ができる」37%、第2位の「日常会話ができる」29%を合わせるとこちらも回答者の約3分の2となり、令和になって2回の調査結果からは中国語目標レベルの上位1、2位はほぼ同じである。一方H15年では第1位「中国旅行で使える」が半数の50%を占め、第2位の「日常会話ができる」と第3位の「簡単な挨拶ができる」は合わせても約4割にとどまっている。以上のデータから中国語の目標レベルは、平成と令和の調査では有意な差があることが見て取れる。H15年、R3年の調査に設けた選択肢「新聞記事やテレビが分かる」はH15年の5%からR3年は3%に減っている。本アンケート調査では比較検討のため質問項目にはH15年、R3年は基本的に同一選択肢を用いているが、インターネット環境が格段に整った現在、ネット上でデジタル版新聞や動画ニュースを視聴する学生がいた場合、「新聞やテレビが分かる」は選択しないであろうこと、またR3年の自由記述ではインターネット上で中国のコンテンツを視聴と回答した学生が散見されたこともあり、R6年は「新聞記事やテレビが分かる」は「インターネットや動画の視聴ができる」に変更した。

Q4 教科書以外に利用しているもの（複数回答可）



Q4教科書以外に利用しているものの選択肢について説明すると、まずR3年にはH15年調査時の選択肢「テープ、CD、ビデオ」を「CD、DVD」に変更した。その理由としてH15年は教科書のAV資料として「テープ、CD、ビデオ」を選択肢としたが、R3年調査時には教科書の音声資料としてCDが標準で付属し、すでに教師指導用のテープ教材もすでになかったからである。R6年現在ではこれまで教科書に付属していたCDの多くは音声ダウンロード方式に移行している。振り返ればH15年にはCD付属の教科書は普及していたが、音声資料として教科書準拠のテープもまだあった。また映像資料の

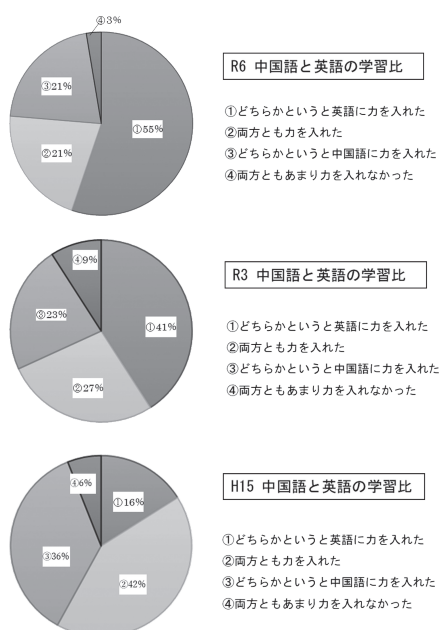
ビデオはすでになく、再生に必要なビデオデッキも2016年で製造終了となっている。後述するようにCD、DVDに替わる選択肢としてR6年には「YouTube」、「検索サイト」を設けた。

「辞書」についてはH15年に教科書以外に利用しているものとして最多であったが、R3年では「なし」を除くと僅差で「ラジオ・テレビ講座」、「その他」に続く第3位に順位を落とした。一方H15年には「ゼロ」であった「その他」がR3年には第2位であること、またR3年には「なし」が「ラジオ・テレビ講座」の倍以上で最も多い理由は、「教科書以外に利用しているもの」として、実際はWeb上のオンライン辞書を利用している学生が多く存在するからである。かつオンライン辞書利用の場合は「その他」あるいは「なし」を選択していることがコメントから分かった。紙媒体の辞書ではなく「オンライン辞書」利用の増加がみてとれたことから、R6年には「辞書（オンラインを含む）」に変更した。

R3年の調査でQ4を「なし」、「その他」と回答した履修者のコメントを精査すると、実際にはYouTubeをはじめWeb上のさまざまなコンテンツを利用していることがわかった。ただR3年に設けた選択肢には該当するものがないため、利用状況が正確に把握でなかった反省からR6年は保坂と盧で検討の上、現在の学習実態に応じた選択肢「YouTube」、「検索サイト」、「Chat GPT」を設けた。

「その他」では「中国人の友だちとの言語交換」、「中国のドラマ観賞」との回答があった。

Q5 中国語と英語との学習比

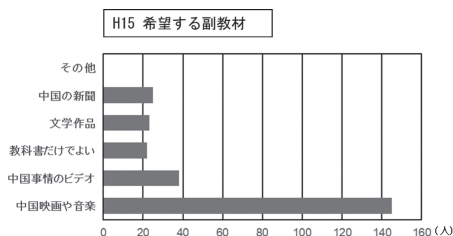
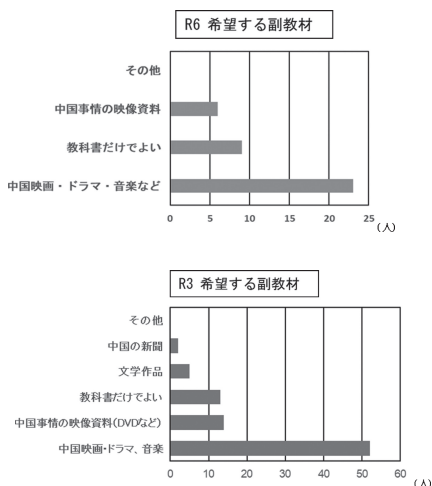


Q5中国語と英語との学習比の調査結果では令和に入ったR3年、R6年の2回の調査とH15年の調査では有意な違いが見られる。R6年は「両方（中国語・英語）とも力を入れた」は21%、「どちらかという中国語に力を入れた」の21%を合わせると中国語に力を入れて取り組んでいる学生は全体の4割あまりである。R3年では「両方とも力を入れた」は27%、「どちらかという中国語に力を入れた」の23%を合わせると中国語に力を入れて取り組んでいる学生は全体の5割である。R6年は「英語に力を入れた」の55%に「両方とも力を入れた」21%を加えると、英語に力を入れて取り組んでいる学生は全体の4分の3に達している。R3年は「どちらかという英語に力を入れた」の41%に「両方とも力を入れた」27%を加えると、英語に力を入れて取り組んでいる学生は全体の3分の2である。一方、H15年では英・中の学習比では「両方とも力を入れた」が42%で最も多く、「中国語に力を入れた」の36%を合わせると、

中国語に力を入れ取り組んだ学生は全体の4分の3を占める。したがって令和に入ってからと比べるとH15年は中国語学習に力を入れた学生の割合が多いといえる。ただしH15年は選択必修科目としての履修でありR3年、R6年は選択科目としての履修のため、必修か選択かの違い、すなわち単位を落とすと翌年に再履修が必要という縛りが結果に影響を与えている可能性はある。

以上の結果からは本学学生は外国語学習に力を入れ取り組んでいることが分かるが、現在は中国語より英語学習に力を入れている傾向のようである。しかしながら中国語をいやいや学習しているわけではない。25年以上前になるがH7年に本学を含む首都圏8大学の第二外国語履修学生に行ったアンケート調査⁽³⁾では英語と中国語の「両方とも力を入れなかった」という学生が20%にも達していたことと比べても、本学学生は総じて語学学習に前向きであることが見て取れる。

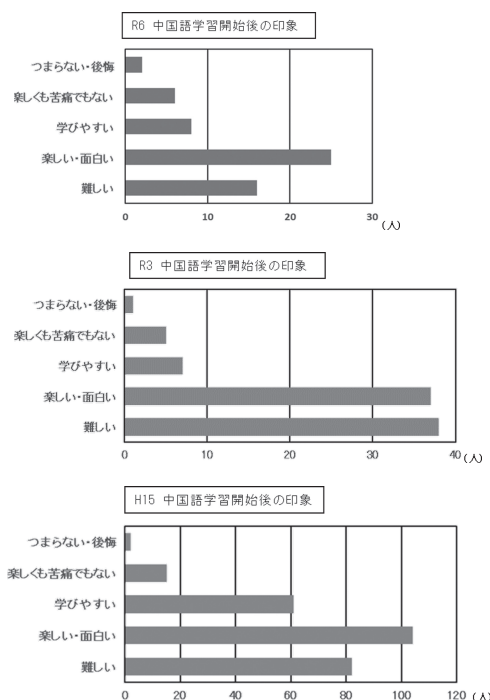
Q6 希望する副教材



Q6希望する副教材ではまずR3年とH15年の調査について取り上げる。比較のために回答の選択肢は基本的に同内容を心がけたが、Q4で触れた理由からH15年の選択肢「中国事情のビデオ」はR3年では「中国事象の映像資料 (DVD)」に変更した。R3年とH15年との回答で大きく異なるのは「中国の新聞」や「文学作品」を希望する学生が大幅に減少したことである。その一方でR3年は「中国映画・ドラマ・音楽」などの視聴覚資料を希望する比率が高まった。そのためR3年はH15年の選択肢「中国映画や音楽」としていたものに「ドラマ」を加えた。これはH15年にはテレビ放映のなかった中国ドラマがR3年ではテレビやネット上で視聴可能になっていたからである。

Q4の結果からも見て取れるように、時代とともに学生の希望する副教材は紙媒体教材から視聴覚資料へと移行していることが分かる。以上の調査結果をふまえR6年の選択肢は「中国事情の映像資料」、ポップカルチャー全般として「中国映画・ドラマ・音楽」、「教科書だけでよい」、「その他」の4つを設定した。「その他」選択の場合は具体的に記述するよう求めた。その結果「中国映画・ドラマ・音楽」が60%、「中国事情の映像資料」16%、「教科書だけでよい」が24%となり、「その他」は0であった。

Q7 中国語学習開始後の印象（複数回答可）



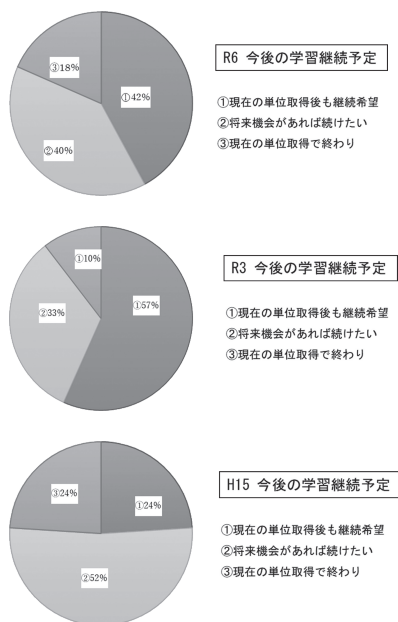
Q7中国語学習開始後の印象では、3回の調査中ではR3年の「楽しい・面白い」との回答が全体の56%であったのに対し、ほぼ同数の57%が「難しい」と回答していることが目を引く。H15年もR3年とほぼ同じ割合の52%が「楽しい・面白い」と答えているが、「難しい」はR3年より少なく全体の4割ほどにとどまっている。R6年では「楽しい・面白い」は66%となり回答者全体の3分の2に増加している。R3年のみ「難しい」の回答が最も多かった。

中国語では漢字（簡体字）を見れば意味が理解できることが多いため、なんとなく「漢字だから簡単」だろう、「易しい」はずだと中国語を選択する学生が多い。実際に非漢字言語圏の学生に比べると日本人は漢字から視覚的に理解できる部分が多く、学習開始時は非漢字言語圏の学習者より有利で中国語は「学びやすい」のも事実である。しかし見て馴染みのある漢字でも音となると全く異なり、学習開始後に学ぶ中

国語の母音、子音、声調などの発音は種類も多く予想に反して「難しい」と感じる学生は少なくない。学習が進み、徐々に音を聞いて中国語の単語が理解できるようになり、ペアで簡単な挨拶ができるレベルになると「楽しい」と感じる気持ちが多く湧いてくるようである。

R3年で「難しい」との回答が多くなった理由としては、おそらくH15年、R6年と授業形態が異なったことが影響している可能性が挙げられる。R3年はコロナ禍のため遠隔授業（オンライン同時双方向）となり、授業では結果的に「聞く」「話す」ことが多くなった。そのため教室での対面授業で黒板を使用し中国語を「書く」ことも多く「学びやすい」と感じる授業に比べ、難しいと感じる割合が多くなったのではないと思われる。

Q8 今後の学習継続予定



Q8今後の学習継続予定を「単位取得で終わり」と回答した学生はR6年の調査では18%、R3年は10%、H15年の調査では24%であった。一方今後の学習予定を「現在の単位取得後も継続したい」とした学生と、途中で間があいても

「将来機会があれば続けたい」とした学生を合わせると R6年は82%、R3年は90%、H15年は77%であった。

ここで「将来機会があれば続けたい」という回答は2つのケースが考えられる。一つは履修の関係から在学中に連続して履修できないが、学習の間に空いても続けたい（実際に1年次に履修後、3年次、4年次になって履修する学生も一定数いる）、もう一つは卒業後に学ぶ機会があれば学習したいというケースである。一方 H15年でも「将来機会があれば続けたい」は52%と半数以上であり、R3年、R6年より有意に多い。この理由については R3年、R6年の回答者は1年生が主であるのに対し、H15年では必修2年目として学ぶ2年生が多く含まれていたことが影響していたと思われる。この点を考慮すると H15年の「現在の単位取得で終わり」の24%ともつじつまが合う。「現在の単位取得後も続けたい」「将来機会があれば続けたい」学生が多いことは、現在の授業が学習意欲やモチベーションの維持に役立ち、一定の教育効果があるものと考えられる。

4. 先行調査研究との比較からみた学習目的・意欲、意識の変化

H15年に授業内実施の調査回答者は200名、R3年のウェブ（Google Classroom）上での回答者は66名、R6年はメールアドレス等の個人情報と紐づかないように配慮し QR コードを示し、任意に回答してもらう形式では履修者の3分の2にあたる38名から回答を得た。回答者数では200、66、38と大きな差があるため、調査結果の数字を同条件で比較することはできない。しかし調査結果の比較分析からは、以下のような中国語履修学生の学習目的、意欲および意識の変化傾向を指摘することができるであろう。

まず第1に R6年には Q1中国語選択理由の第

1位として「中国人とのコミュニケーション・交流」が45%でトップになったことである。R3年は「中国人とのコミュニケーション・交流」は9%で第4位、H15年は6%で第4位であった。今から20年近く前、学生が学んだ中国語を使う場としてまず想定されるのは「中国旅行」だった。H15年では Q3中国語の目標レベルの第1位は「中国旅行で使える」の50%であり、Q1中国語選択理由の第1位は「中国や中国語に興味あり」であった。今回の Q9その他（自由記述）には「中国語学習の動機は中国人の友だちができたこと」、「同学年にたくさん中国からの留学生がいて、彼女たちは日本語が喋れるけど私は全く喋れないので私も中国語で話したい」や「中国語で会話している友だちがどんな内容を話しているか気になるので頑張りたい」、などの記述が複数みられた。日本で身近にいる中国人と中国語でコミュニケーションをとりたいとの意欲が高まっていることが見て取れる。

また「お母さんの話していることを理解して、中国語で会話したいと思ったから」というコメントからは中国にルーツを持つ学生であることがうかがえる。外見からは分らないが、本学を含め日本には中国も含め外国にルーツを持つ学生生徒が増えている。R6年現在では「中国人とのコミュニケーション・交流」を中国語学習目的とし、使用場面は「日本国内で身近な人と」へ変化している。また、R3年から R6年にかけて「中国人とのコミュニケーション・交流」が激増した理由のひとつには R2年から R5年にかけてコロナ禍で減少していた来日中国人観光客、訪日中国人がコロナ禍収束後は一気に増え、街の到るところで中国語が耳に入る環境になったことも関係していると思われる。

第2に Q3の結果が示すように、学生が目標とするレベルは H15年のトップだった「中国旅行で使える」から R3年、R6年では「日常会話

ができる」「簡単な挨拶ができる」に変化していることである。これは Q1で「中国人とのコミュニケーション・交流」を選択した結果を反映している。中国人との交流やコミュニケーションのためという学習目的から、目標レベルを「日常会話ができる」「簡単な挨拶ができる」とするのは自然な流れであろう。私たちの周りでは中国語使用環境が拡大しており、中国語を学ばば身近な場所で中国人とコミュニケーションでき交流のきっかけができる。自由記述から学生が考える「日常会話」や「簡単な挨拶」はアルバイト先やキャンパス内、観光地での中国人との会話などを想定していることが分かる。

第3に Q5の結果から本学学生の語学学習に対する意欲は高く維持されていることが分かった。ただし H15年では中国語に力を入れた学生は全体の4分の3以上であり、令和3年では約5割、R6年では約4割であった。一方 H15年では英語、中国語ともに力を入れなかった学生は6%、R3年では9%、R6年では3%にとどまり、英語または中国語いずれかに前向きに取り組んでいる学生は9割を超えている。また Q8から多くの学生が中国語の学習継続に意欲的であることも明らかになった。

第4に Q4、Q6の回答からはインターネット環境が急速に充実していることによって学生は中国事情や中国関連情報へのアクセスが格段と容易になり、興味や関心が多方面に広がっていることも明らかになった。さらに本学では R6年度に学内 Wi-fi 環境が整い、学生はいつでもネット検索が可能になり情報を得ることが容易になったことも学習意欲を高めることに大いに役立っている。

5. 学習効果を高める教育方法

以上の調査分析をふまえ、第2外国語中国語教育として学習効果を高める教育方法を考えて

みたい。まず R6年に中国語選択理由のトップとなった「中国人とのコミュニケーション・交流」や「中国のポップカルチャーに興味あり」、そして「中国や中国語に興味あり」という結果からは、学習内容としては教養教育としての文法や作文、講読などのいわゆる読み書きを中心としたものは適切とはいえず、「話す」、「聞く」の比重を徐々に増やす方向にシフトしていくのが望ましいと思われる。前報⁽⁴⁾でも触れたが外国人が日本や日本語に興味を持つきっかけは、日本のアニメだったという話はよく聞く。外務省のホームページには外交政策中に「ポップカルチャー外交」⁽⁵⁾が紹介されている。そこには「外務省では、我が国に対するより一層の理解や信頼を図るため、従来から取り上げている伝統文化・芸術に加え、近年世界的に若者の間で人気の高いアニメ・マンガ等のいわゆるポップカルチャーも文化外交の主要なツールとして活用しています」とある。つまりポップカルチャーは「外務省のお墨付」なのである。これも踏まえて学生の学習意欲をより喚起するために日本はもとより、時には中国のポップカルチャーも副教材として利用し、中国語教育・学習にうまく繋げていくことは有効であろう。

学生は、自分の興味や関心のある情報を得るために中国を知りたい、中国語を学びたいという気持ちを持ち中国語を学んでいることは明らかである。Q9には「中国のゲームが好きで、中国語を話す人と関わる機会が多いので、現在は英語や日本語でチャットをしています中国語でもコミュニケーションをとれたらよいと思い、興味を持ちました。」のように、ゲームから中国語に入り英語、日本語でのコミュニケーションに繋がってきたことや、「中国ドラマや食にも関心を持ち始めたので学んだ中国語が活かせるようになりたいです。」のようにドラマや食がきっかけとなって中国語を活かすことに

結びつけたいというコメントも見られた。

また中国にルーツを持つ学生は、家族や親類と日本語だけではなく中国語でも会話をしたという気持ちから中国語を学んでいることも多かった。また、中国ドラマやC-popを楽しみたい、もし中国旅行に行く機会ができれば現地の人と中国語で話してみたいといった学生の要求に応え、さらに本学教養教育科目(技法知)⁽⁶⁾としての期待にも沿う中国語力は、前章でも述べた自ら情報を収集し発信できるコミュニケーション能力である。そのため中国語の基本文法は押さえながら、教材は場面設定を日本とした教材、たとえば学生生活や季節の行事、買い物や交通事情、そしてポップカルチャーなど、学生が中国人に積極的に情報発信できるような内容も取り上げることが望ましいであろう。

今回の調査結果ではQ4教科書以下に使用しているもので、最も多かったのはGoogleなどの検索サイト、次いでYouTubeであった。また本学ではまだ少数とはいえChat GPTの利用も確認できたことから学生はすでに情報収集の基礎が備わっていると判断してよい。学内のWi-Fi環境も整い、今後は情報発信を心がけコミュニケーション能力を高めるために授業では中国語を聞き、話す比重を多くしアクティブラーニングを取り入れることが大切であろう⁽⁷⁾。Q9には「覚えた単語や文を友だちと言い合って練習するのが楽しい」や「授業で練習した挨拶言葉をバイト先で使ったら通じた」など、学生が手ごたえを感じているコメントは教員としても励みになる。

本学では選択科目としての第2外国語科目は、1回90分の授業を半期15回で1コマとし、2コマで学習が終了する。インターネット上では中国関連や中国語学習関連の動画など役立つ情報も増え、誰でも簡単にアクセス可能になってきており、自学可能な環境は少しずつ増加してい

る。しかし同時に根拠のない情報や信頼できないものの少なくない。教員はインターネット上の情報を精査し、利用するにあたっての注意事項を学生に周知した上で適切に利用を促すようにすれば、授業を離れても学生は中国語学習のモチベーションを保ち、中国語の自学が可能となり学習効果を高める一助となるのではないだろうか。もちろん従来どおりの辞書や参考書、書籍や新聞などを利用した学習方法、情報検索方法も引き続き紹介していく。

6. 結び

本稿では本学中国語履修学生を対象としR6年7月に実施したアンケート調査とR3年7月に実施したアンケート調査、およびH15年に実施したアンケート調査との比較分析を行った。結果に基づき、中国語履修学生の学習目的・意欲、意識の変化等の考察を行い、今後の学習効果を高める教育方法について提案を行った。なお、調査にあたってR6年は一部回答選択肢を環境の変化に即したものに変更した。本稿は本学の限られた人数の学生を対象にしたものであるが、さらに意義ある研究をものとするために調査対象数を広げ、他校との比較を行うこと、また教員側の意識や社会が期待する第2外国語教育などの調査も行いたい。今後の課題とした。

[注]

- (1) ドイツ語、フランス語、スペイン語、中国語の4か国語
- (2) 2023(令和5)年度外国人留学生在籍状況調査結果に基づき算出。
<https://www.studyinjapan.go.jp/ja/statistics/enrollment/data/2405241100.html>
- (3) 「首都圏8大学第二外国語履修学生を対象

に行ったアンケート」

調査期間：平成7年11月～12月

対象：首都圏8大学、第二外国語履修学生

有効回答数：411名 *この結果は保坂律子1997に詳しい。

- (4) 保坂律子2021「中国語学習目的の変化に関する調査研究」『駒沢女子大学「研究紀要」第28号』 pp75-84
- (5) 外務省ホームページ 広報文化外交＞文化の交流＞ポップカルチャー外交 <https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/culture/koryu/pop/index.html>
- (6) 本学での第2外国語の位置づけ。
- (7) 授業終了後の中国語ネイティブの教員との会話を楽しみにしている学生も多い。

[参考文献]

- ・保坂律子1997「履修目的から考える中国語教育研究」—アンケート調査にみる履修の現状と教育方法の課題—『お茶の水女子大学人間文化研究科年報』第二十号、pp76-86
- ・保坂律子1998〈日本大学生汉语学习情况调查〉《世界汉语教学》第2期（中国・北京）pp106-110
- ・保坂律子2003「中国語学習目的・意欲の変化に関する調査研究」『駒沢女子大学「研究紀要」第10号』 pp257-268